

共生社会の実現に向けた生涯学習支援に係る実践研究事業  
 第1回コンソーシアム連携協議会 協議の記録  
 (中部) 地区 (7月12日)

【出席者】

|                             |             |        |
|-----------------------------|-------------|--------|
| 県立清武せいりゅう支援学校               | 校長          | 横山 貢一  |
| 宮崎大学教育学部学校教育課程発達支援教育コース     | 准教授         | 若林 上総  |
| 社会福祉法人宮崎県社会福祉協議会            | 地域・ボランティア課長 | 大山 晃代  |
| 有限会社サン・グロウ                  | 代表取締役       | 濱門 康三郎 |
| 一般社団法人 宮崎県手をつなぐ育成会          | 理事          | 井上 あけみ |
| 宮崎市肢体不自由児・者父母の会連合会(県副会長)    | 会長          | 田中 聡子  |
| NPO法人 障害者自立応援センターYAH!DOみやざき | 副理事長        | 山之内 俊夫 |
| 宮崎市教育委員会生涯学習課               | 主任主事        | 松岡 真一郎 |
| 新富町社会福祉協議会                  | 係長          | 嶋末 剛   |
| 中部教育事務所                     | 指導主事        | 佐藤 賢   |

【協議の記録】

実践研究団体について

ライフカンパニー新富(井上委員)

- ・ 日頃から利用している利用者(知的)を対象としている。
- ・ 新富町教育委員会にお願いして、上新田小学校の跡地を使用させてもらうことにしている。
- ・ 学校跡地のため、花壇を使って農作物体験や体育館を使ってスポーツ等をできたらと考えている。
- ・ その他防災についての学び、料理活動などコロナの状況を考えながら実施したい。
- ・ 障がいのある人だけではなく、地域の方を交えてマルシェのようなものを行いたい。
- ・ 自分の事業者のものだけではなく、他の事業所のものも販売する機会があるとよい。
- ・ まずは、実行委員会を立ち上げて計画を考えていきたい。

YAH!DO みやざき(山之内委員)

- ・ 活動についてはまだあまり固まっではないが、YAH!DO みやざきのメンバーだけではなく、地域の障がい者や、特別支援学校にも声をかけて、10から20名で実施していきたい。
- ・ 活動を始める前に、オリエンテーションなどで人間関係づくりから始めたい。
- ・ 自立生活プログラム～何から何までお膳立てされるのではなく、自分たちがやりたいこと(車椅子利用者のおしゃれメイク、ヘア、ファッションショーなど)
- ・ 今回の事業がイベントで終わるのではなく、継続してできるものにしていきたい。
- ・ 障がいのある人だけではなく、障がいのあるなしに関係なく参加できるものにしていきたい。
- YAH!DO みやざきさんの活動は、特別支援学校とつながると持続的な取組になるのではないか。
- 自らサービスを受けられる人だけではなく、在宅でアウトリーチが必要な方への取組はどうだろうか。
- 学校を卒業すると、関わる人が家族と福祉施設の方だけになってしまう。

広報する手立てについては

- 月に1回、SNSやインスタを活用しようと考えている。
- まずは、メンバーの中で情報共有、ICTの活用については日本大学の古市先生がモーションキャプチャーの研究を行っており、バーチャル運動会などを行っている。ハンディキャップのある方も一緒に活動できる方法の1つであるのではないか。

情報の一元化について

- 情報もよいが、まずは映像等をあげ、興味を持たせて情報につなげるという方法もあるのではないか。

公民館講座について

- 施設のハード面で十分ではないが、バーチャル博物館、電子図書館などの方法も対応できるのでは。
- 2団体とも子どもが関わるとよいのではないか。子どもたちに「どうしたらできるのかを考えさせる」ことが大切であると思う。それこそが「生涯学習」ではないか。

共生社会の実現に向けた生涯学習支援に係る実践研究事業

第1回コンソーシアム連携協議会 協議の記録

(南部) 地区 (7月12日)

【出席者】

|                       |      |       |
|-----------------------|------|-------|
| 県立都城きりしま支援学校          | 教諭   | 川越 浩司 |
| 県立小林こすもす支援学校          | 主幹教諭 | 福崎 正浩 |
| 南九州大学人間発達学部子ども教育学科    | 准教授  | 野村 宗嗣 |
| 霧島おむすび自然学校            | 事務局長 | 壹岐 博彦 |
| 子どもと家族・関係者の集まり ポン太クラブ | 会長   | 外山 明美 |
| 都城市教育委員会生涯学習課         | 副主幹  | 桑田 玲奈 |
| 小林市教育委員会社会教育課         | 主幹   | 戸高 明廣 |

【協議の記録】

関係機関の参画による地域コンソーシアムの形成について

- 書面で確認することが大事 (学校は担当が変わるとうまく引き継がれない可能性がある。)

障がい者の学びのニーズに踏まえた講座内容・方法について

- 障がい者に特化した講座はなかった。どれだけ福祉部局と連携できるかが大事だと考える。
- やりたいけどやれないことを部局同士で連携することで実施可能になることがあるのではないかな。
- こんな講座があったらいいなというものを出していくといいのではないかな。  
ex) 卓球バレー

学校教育法第105条に基づく履修証明書について

- 履修証明制度について、もう少し詳しく議論する必要がある。(何のために証明するのか。)
- 就職、生活に有利に働く場面があるとよい。

特別支援学校等における生涯学習の意欲向上に資する取組について

- 「ようこそ先輩」…卒業生を呼んで話をしてもらう。→意欲向上につながるのではないかな。
- 何かスポーツがあればよいのではないかなということで、卓球バレーを考案(転がして当てる)、卒業後もできる。
- 同窓会は支援学校にそれぞれあるが、学校外で集まることはなかなかないのが現状である。

障がい者の学びを支援する人材の育成

- 手話サークルをやっている。学生を受け入れる機会を設けてもらえると学生がより現場での実践力を身につけてもらえるのではないかな。
- 公民館で手話講座はあるのか。
- 今後取り入れたい。(都城)
- 講座の学びのニーズがあまりない。
- ボランティア養成講座を行い、登録してもらって人材バンクを作ることもあってよいのではないかな。
- 宮崎県もかつては養成講座があったので再開するとよいのではないかな。
- お金の集め方に課題がある。「益はない、お礼もできない。制度としてあるとよい。」

共生社会の実現に向けた生涯学習支援に係る実践研究事業

第1回コンソーシアム連携協議会 協議の記録

(北部) 地区 (7月12日)

【出席者】

|                      |              |                |
|----------------------|--------------|----------------|
| 九州保健福祉大学臨床心理学部臨床心理学科 | 講師           | 戸高 翼           |
| 県立特別支援学校 PTA 連絡協議会   | 会長           | 甲斐 麻央          |
| 日向市地域福祉コーディネーター連絡会   | 地域福祉コーディネーター | 成合 進也          |
| 株式会社グローバル・クリーン       | 代表取締役社長      | 税田 和久(代理 瓶内隆行) |
| 一般社団法人宮崎県作業療法士会      | 作業療法士        | 内勢 美絵子         |
| 宮崎 LD・発達障がい親の会 フレンド  | 会長           | 猪股 重子          |
| 旭化成アビリティ延岡営業所 総務課    | 総務課          | 笠 里美           |
| 延岡市教育委員会社会教育課        | 主任主事         | 串間 信之(代理 後藤英之) |
| 日向市教育委員会生涯学習課        | 課長補佐         | 治田 健吾          |
| 北部教育事務所              | 社会教育主事       | 佐藤 良衛(代理 原田建一) |

【協議の記録】

- 県北地区では、さまざまな取組がなされている。昨年度の会でも確認された。点の取組を線にすることが必要。
- これまでの取組の中で出来そうな取組を基に形を作る。一から新しいものを作ることは難しい。
- 8つの視点に基づいた取組について、当事者はどのような支援が必要なのか。ニーズ調査の必要がある。
- 障がいのある方は、仕事が終わった後、どのように過ごしているのかと思っている。
- 取組の前には、ただやってみるのではなく、十分な検討が必要。
- 昨年度のアンケート調査を読んだが、広い内容であった。コミュニケーションとしてどのような取組があるのか、活動と参加者を繋ぐにはどうすればよいか考える必要がある。
- 昨年度のアンケート結果冊子が手元にないので欲しい。
- 重度の障がいがあると外出が難しい。学校卒業後、外出の機会が減ることが想定されるが、出来れば外出して関わりを持ちたい。関係機関にサポートを依頼しようとしても、近年、ボランティアが高齢化している。サポート体制が少しずつ整うとよい。
- 人との関わりを持ちたい人が一方、関わりを持つことが苦手な人もいる。さまざまな方法で関わる事が出来るとよい。
- 行政としてどのような内容が求められるのか考えている。取組はまだまだかもしれない。待ちの姿勢ではなく、一緒に考えていきたい。
- 現在の生涯学習講座をどのようにすれば障がいのある方にも参加してもらえるか検討を行った。講師に障がいのある方も参加できるか聞くのが良いか、しかし、障がい種がいろいろとあり、必要なサポートもそれぞれであるため、難しい。
- 情報の一元化という点では、行政は情報を持っているので、「情報はここにありますよ。」と知らせることが可能かもしれない。
- 情報の一元化という点について、届け方、誰に届けるかが重要である。
- 実際にやってみると見えてくることもあるので、さまざまな取組をやりたい取組、やってみたい取組を次回までに考えてきましょう。